

The Economist にみる関係代名詞制限用法 *which* の 使用頻度の変化とその背景についての推察

小 西 和 久

(早稲田大学)

1. はじめに

本稿では英国の一流紙 *The Economist* (以下、*Economist*) を参照して、関係代名詞制限節で使われる *which* (以下、制限 *which*) の用法と頻度が 1988 年から 2018 年の 30 年間にどのように変化したかを考察する。その上で、小西 (2019) ¹で行った米国の *The New York Times* (以下、NYT) における 1985 年から 2018 年の約 30 年間における制限 *which* の用法・頻度の変化と比較する。

一方、過去 100 年に制限 *which* の使用頻度が減少し *that* の使用頻度が上昇傾向にあること、さらには近年その傾向が加速していることが、様々な研究で指摘されている。こうした傾向の背景には、「英語の口語化」(colloquialization) により、「文語的な *which*」が「口語的な *that*」に置き換えられるという現象が進んでいるとの見方が有力である。これに加えて、「*that/which* ルール」という「規範主義」(prescriptivism) が 1960 年頃から、特に米国で浸透し始めたことも *that* 増・*which* 減が促進される要因となっていると見られている。これらの点に関しても推測の域を出ないが検討してみたい。

2. *that/which* ルールについて

本稿の考察は、関係代名詞の用法に関わる「*that/which* ルール」と密接に関係しているので、まずは *The Chicago Manual of Style* を参照して本ルールを概観したい (以下、下線は筆者)。

- (1) In polished American prose, *that* is used restrictively to narrow a category or identify a particular item being talked about {any building that is taller must be outside the state}; *which* is used nonrestrictively—not to narrow a class or identify a particular item but to add something about an item already identified {alongside the officer trotted a toy poodle, which is hardly a typical police dog}. . . . In British English, writers and editors seldom observe the distinction between the two words.²

つまり、(先行詞が人やニックネームが付けられた動物以外の場合には) 制限節では関係代名詞 *that* を用い、非制限節ではカンマを付して *which* を使うことを推奨している。米国で書かれた洗練された文章ではこのルールが遵守されるが、英国ではほとんどの場合にラ

イターもエディターも *that* と *which* の違いを区別しない、と断言している。

一方、Pinker (2014:235) は *that/which* ルールを次のように説明している。

- (2) The choice between *that* and *which*, according to the rule, is simple: nonrestrictive relative clauses take *which*; restrictive relative clauses take *that*. . . . One part of the rule is correct: it's odd to use *that* with a nonrestrictive relative clause, as in *The pair of shoes, that cost a thousand dollars, was hideous*. So odd, in fact, that few people write that way, rule or no rule. . . . The other part of the rule is utterly incorrect. There is nothing wrong with using *which* to introduce a restrictive relative clause, as in *The pair of shoes which cost five thousand dollars was hideous*. . . . [G]reat writers have been using it for centuries. . . .

that は制限用法で用い、非制限用法では用いないという指摘は正しいが、制限 *which* を使うことには何ら問題はなく、優れた著述家は何世紀にわたり制限 *which* を使ってきた、との主張である。

上記の(1)と(2)は制限 *which* の使用に関して正反対の立場と言えよう。そして、両者の中間に位置するのが Barzun (2001:84) の次の見解であろう。

- (3) In numerous works on grammar you will find a rule which appeals to those who like their guidance cut-and-dried. The rule says that the relative pronoun which introduces a defining (restrictive) clause must always be *that*; the pronoun for nondefining clause is *which*. . . . I recommend using *that* with defining clauses, except when stylistic reasons interpose.

Modern American Usage の編者の一人でもある Barzun は、上記のように *that/which* ルールの遵守を推奨している。ただし、文体上の理由がある場合には制限 *which* の使用を認めている。例えば、① 接続詞や代名詞などの *that* が関係代名詞 *that* と同文中に混在する場合、② 文構造の明確化のために *which ... and for which* などのように関係代名詞をペアで使う場合、③ *in which* などのように関係代名詞の直前に前置詞を伴う場合、④ 接続詞と関係代名詞を組み合わせた *that that* を避けて *that which* をする場合、などである。

念のために、*Chicago Manual of Style* の電子版の解説文を検索してみると、制限 *which* の使用は引用されている例文と解説文中の「前置詞＋*which*」以外には見られない（因みに、「前置詞＋*which*」を「前置詞＋*that*」で置き換えることは非文法的なので、本稿では制限 *which* の用法としては検討対象としていない）。一方、Pinker (2014) と Barzun (2001) を参照して、両者が自ら書いた文章の中で関係代名詞制限用法の *that* と *which* をどのような比率で使用しているか調べてみると、前者が *that* 354 例：*which* 77 例で 86%：14%、

後者が *that* 94 例 : *which* 28 例で 77% : 23% となっている (この場合にも「前置詞+*which*」除外している)。因みに、Mark Twain の *The Adventure of Tom Sawyer* (1876 年出版) が 83% : 17%、Earnest Hemingway の *The Old Man and the Sea* (1952 年出版) が 90% 対 10%、*Washington Post* 紙の記者 Bob Woodward と Carl Bernstein の *All the President's Men* (1975 年出版、邦題『大統領の陰謀』) が 86% : 14% である。*that/which* ルールを遵守した上で、文体上の理由で制限 *which* を用いた場合の *that/which* 比率の目安となる。

なお、優れた文筆家や英米の一流メディアがなぜ *that/which* ルールを重視するのかという、より根本的な議論に関しては、例えば小西 (2015:3-4) を参照願いたい。

3. *Economist* にみる制限 *which* の使用頻度と用法の変化

3.1 *The Economist Style Guide* の *that/which* ルールと制限 *which* に関する解説

英米の一流メディアのスタイルブックには *that/which* ルールが例外なく記載されているが、*The Economist Style Guide* も次のように解説している。

- (4) *Which* informs, *that* defines. *This is the house that Jack built. But This house, which Jack built, is now falling down.*

Americans tend to be fussy about making a distinction between *which* and *that*. Good writers of British English are less fastidious. (“We have left undone those things which we ought to have done.”) ³

which は情報を提供し、*that* は意味を限定するとした上で、それぞれの例文を示しており、非制限用法ではカンマが付されている。一点興味深いのは、文章が上手な英国人は米国人ほど *which* と *that* の区別をうるさく言わないとして、*We have left undone those things which we ought to have done.* という制限 *which* を用いた例文を示している。つまり、米国では those thing that のように書こうが、英国では耳障りな近接する *th*-音の繰り返しを避ける傾向があるとしている。因みに、Barzun や Pinker が書いた文章においてもこのような *th*-音の連続を避ける傾向が見られる。

この指摘は制限 *which* の用法を理解するために役立つが、さまざまな制限 *which* の用例を理解するにはこれだけでは不十分である。

3.2 制限 *which* の用法を検討するための視点

英米などの小説家や一流メディアなど (以下、careful writers) が前項 2 に示したように *that/which* ルールを原則遵守しつつも時折、制限 *which* を用いる現象は長年にわたり文法や語法の専門家の注目を集めてきた。*that/which* ルールの起源は、H.W. Fowler と F.G. Fowler 兄弟が *King's English* を出版した 1906 年との見方があるが、さらに 300 年程度遡るとの説もある。何れにせよ、careful writers が時折とはいえ、文体上の理由で制限 *which* を用いているわけだが、さまざまな用例を理解するための包括的、且つ広く受け

入れられた用法解説は未だ存在しない。

こうした中、筆者はこれまで英・米・豪・アイルランド・インドなどの英語母語者に制限 *which* のさまざまな用例を示して、なぜ *that* ではなく *which* が選択されているのか尋ねてきたが、殆どの用例に関して明確な回答は得られていない。その結果、英語母語者は *that/which* ルールや制限 *which* の運用を「感覚的」に行っているのではないかと推察するに至っている。但し、それにも拘わらず、実際の用例を見比べると規則性が見られることが興味深い。日本人の多くは、「が・の・は」などの格助詞や副助詞の使い分けを上手く説明できないが、その運用には規則性が見られる。これと似た現象なのだろうか。

こうした中、本稿の主な狙いである *Economist* の制限 *which* の使用頻度・用法が過去 30 年間にどのように変化したかを考察するに当たって、小西 (2019) で行った NYT の 1985 年～2018 年の約 30 年間における制限 *which* の使用頻度・用法の考察で用いたのと同じ手法を用いることにしたい。その手法を若干の修正を加えて、長文であるが次項に引用する。

3.3 制限 *which* の用法

英米の一流メディアはそれぞれのスタイルブックで記者や編集者に対して *that/which* ルールの重要性を例外なく説いているが、制限 *which* の用法を具体的に示しているのは著者が知る限り次の①～③のみである。

① *Associated Press Stylebook*:

He said Monday that the part of the army which suffered severe casualties needs reinforcement.⁴ (*that* に代えて *which* を用いることで、異なる品詞の *that* の混在を避けている)

② *The Economist Style Guide*:

We have left undone those things which we ought to have done. (前述の通り、*th*-音の耳障りな連続を避けているが、2 つまでの *th*-音の連続は容認しているように思われる。但し、*that that* は見られず、*that which* が用いられている)

③ *The New Yorker*:

... a book about misbehavior which I very much enjoy.⁵ (*The New Yorker* が考案したと言われる exceptional *which* と呼ばれる用法で、先行詞は離れて位置する *book* であることを示している。*misbehavior* が先行詞の場合には *that* が用いられる。ただし、先行詞句がこれと同様の構造でも、*book* の位置にある名詞が先行詞であることが明らかかな場合は *that* が使われることもある。また、先行詞となりうる名詞が 3 つ並んでいて、2 つ目が先行詞の場合には *that* が選択される傾向がある。*which* を使うと最も離れた名詞が先行詞と誤解される可能性があるためと思われる)

しかし、上記の①～③だけでは、英米の一流紙や小説などで用いられている制限 *which* の用法を理解することは依然として困難である。そこで、上記の制限 *which* の用法に直接・間接的に関わっていると思われる要因を次に列記する。

④ H.W. Fowler:

A hatred of the rule that is not only unable to give them protection, but which strikes at them blindly & without discrimination. What has caused the change from *that* to *which* here is the writer's realizing that *but that* is somehow undesirable ; it is so, because of the repugnance of *that*, mentioned above, to being parted from its antecedent. . . .⁶ (*that* と *which* の先行詞は共に *rule* であるが、書き手が *that* を繰り返さずに *which* を用いた理由を Fowler は、遠く離れた先行詞を *that* で修飾することに「強い違和感」を感じるためと解説している。ただし、Fowler は制限用法で *which* を使用することには否定的と思われ、上記の場合には . . . *the rule that not only is unable to give them protection, but strikes at them. . .* とすることを推奨している。用法としては③と似たところがある)

⑤ Wilma R. Ebbitt & David R. Ebbitt:

*He had an exploratory operation for cancer which the doctors were reluctant to undertake but which he was convinced he needed.*⁷ (この文は NYT のピューリッツァー賞受賞記者 David Halbertstam によるものだが、Ebbitt は関係代名詞節が繰り返し使用されていることを明示するために、多品詞の *that* を避けて *which* が用いられていると指摘している。なお、④の用例に見られるように、“...an exploratory operation for cancer that the doctors were reluctant to undertake but which he was convinced he needed.”のように先行詞との距離によって *that* と *which* を付け分けられる)

⑥ John F. Genung:

*That sounds ill when separated from its verb and from its antecedents, and emphasized by isolation: There are many persons that, though unscrupulous, are commonly good tempered, and that, if not strongly incited by self-interest, are ready for the most part to think of the interest of their neighbors. Here who would be better.*⁸(ここでは *that* と *who* の用法を解説している。*that* はその先行詞のみならず、動詞から離れている場合にも違和感があるという。先行詞との距離に関しては前述の Fowler と同様の指摘であるが、関係代名詞とその動詞の間に挿入がある場合で先行詞が人以外の場合には *which* が選択される可能性を示唆している)

⑦ John B. Bremner:

*An exception to the that / which general principle is the use of relative which after the demonstrative that, this, those, these, as in “Give me only that which (better what) I seek” or “Give me only those books which I asked for.”⁹ (*that*, *this*, *those*, *these* の後に、制限 *which* の例外的な使用を認めており、上記②と類似している)*

⑧ Economist:

Facebook keeps buying firms which could one day lure users away: first Instagram, then WhatsApp and most recently tbh, an app that lets teenagers send each other compliments anonymously. (The Economist, Jan. 18, 2018) (先行詞に関する例示や

説明が関係代名詞節末にコロン、ダッシュ、カンマ、括弧などを介して付随している場合、あるいは関係代名詞節を修飾する副詞節や分詞構文などの副詞句が付随している場合に *which* が用いられることが多い)

⑨ *Economist*:

Some of the new demand comes in countries which used to sell gas, not consume it. Egypt has stopped exporting LNG in order to keep domestic supply plentiful and cheap. Gas consumption is rising fast in Indonesia and Algeria, once seen as dependable exporters. (The Economist, Mar. 31, 2014) (先行詞 *countries* の例示が後続の 2 文に示されている。このように関係代名詞節を含む名詞句と密接な関係にある内容を含む文が後続する場合に *which* が用いられる傾向がある)

⑩ Carl Bernstein and Bob Woodward:

Mrs. Graham was told by a close friend who had ties to the administration that the phones of several Post reporters and news executives were tapped. A sweep which was conducted by electronics experts for a fee of \$5000 turned up nothing.¹⁰ (盗聴器が仕掛けられていないかを調べる *sweep* が行われた背景が、関係代名詞が含まれている文の前文(点線部)に書かれている。さらに遠く離れた先行文脈に先行詞に関する重要な情報が記されている場合にも *which* が使われる傾向がある)

⑪ *Statesman Journal*:

Berny supported Dick in developing the Fosbury Flop, a jumping style that revolutionized the high-jump event and which is used universally by high-jumpers today. (The Statesman Journal, Jun. 1, 2013) (④や⑤と同様の例と見なすことも可能。2 つ目の関係代名詞 *which* の先行詞は *style* であるが、もし *that* を使ったとすると、*a jumping style that revolutionized the high-jump event* を指す指示代名詞と一瞬、勘違いされる可能性がある)

⑫ *Economist*:

Last year's trade deficit partly reflected some temporary factors, notably the earthquake and tsunami which disrupted production and exports. (The Economist, Jan. 14, 2012) (*the earthquake and tsunami* は 2011 年 3 月の東日本大震災を指しており、この *which* は本来は非制限用法でカンマが必要である。しかし、カンマがあると先行詞が *factors* と誤解される可能性があるため省略されたものと思われる。これは本来は非制限用法である)

上記の①～⑫の用法は、小西(2015, 2016, 2017, 2018)で詳細に検討したが、いずれの場合も *that/which* ルールが意図的に破られ、①～⑪では *that* に替えて *which* が選択され、⑫では本来あるべきカンマが省略されている、と思われる。

こうした用法を理解するには、*that* と *which* が持つ特質を理解する必要があり、上述④にある Fowler の *repugnance of that . . . to being parted from its antecedent* と、⑥にある Genung の *That sounds ill when separated from its verb and from its antecedents,*

and emphasized by isolation が参考になる。*that* が持つこうした特質は、native speaker が持つ音感に属するものと思われ、nonnative speaker には習得し難いものと言えよう。

用法①～⑫で *which* が選択されている理由を推察したが、careful writers はこれらの用法をどのように捉えているのだろうか。この点に関して、*that/which* ルールを遵守し、①～⑫に見られるのと同様に *which* を用いる米国人で日本文学翻訳者の Stephen Kohl 氏に、同氏自身の制限 *which* の使用例を示してなぜ *that* ではなく *which* を選択したのか尋ねてみた。同氏の回答は、①～⑫のような細かな用法を念頭に置いているわけではなく、“what sounds right”（読んでじっくりくる方）を選択しているとしか言いようがない、との内容であった。

この点に関連して、小西（2018: 62-63）でも考察したが、ノーベル文学賞受賞者の米国人小説家 Saul Bellow が 1994 年 3 月 10 日付の米 *Boston Globe* 紙に寄稿したエッセーの次の文に関する米国の作家・ジャーナリスト・コラムニスト William Safire とのやり取りが参考になる。エッセーにある *Give us a week's moratorium, dear Lord, from the idiocies that burn on every side and let the pure snows cool these overheated minds and dilute the toxins which have infected our judgments.* に関して、Safire が *which* ではなく *that* を使うべではないかと Bellow に指摘したという。これに対して Bellow は次のように答えた。Safire は自らの *The New York Times Magazine* の 2005 年 5 月 1 日付コラムに記している。 *I am only fair at relative pronouns. I do know the restrictive from the nonrestrictive. “Which” sounded better than “that,” and I do go by sounds as well as by grammar.* これは Kohl 氏と同様のコメントと思われ、Bellow もなぜ *which* がじっくり来たのかには触れていない。

では、native speaker が *which* に対して持つ音感とはどのようなものなのか。この問いに対しては、小西（2015:18）で次の 2 人の見解を引用した。J. Lesslie Hall は *Which is a heavy and rather ugly¹¹ word, hard to pronounce rapidly and smoothly; that slides off the tongue much more easily.* と述べている。また、John F. Genung も *That is not a good word to pause upon; when therefore it comes just at a pause who or which will often sound better.*”と述べており、両者の感覚は一致している。

上述の Fowler、Kohl、Bellow、Hall、Genung の指摘をもとにして考えると、*that* の rapid、smooth、あるいは、先行詞と距離があると *repugnance* を感じさせるといった特徴と、*which* の heavy、ugly、あるいは *pause* を感じさせるといった特徴から、この両語は文中の接続点で「交差点に設けられている信号」のような役割を果たしていると言えないだろうか。さらには、これらの特徴により *which* の関係代名詞としての「作用域」が *that* よりも長いとは言えないだろうか。

言い換えると、*that* と *which* が持つこうした特徴の違いを利用して、交通の流れ [つまり、文（章）の流れ] に特段の注意を要しない場合には（つまり、関係代名詞の先行詞や関係代名詞節に特段の意味上の問題がない場合には速やかに読み進めるように）青信号（*that*）を点灯させる。しかし、文（章）の流れに注意が必要な場合には（つまり、先行詞が見極め難い、あるいは先行詞に関する追加情報が当該文の先行文脈に記載されている、

あるいは関係代名詞節の構造が長く複雑、あるいは当該文の後続文脈に例示などがあるといった場合には黄信号 (*which*) を点灯させて、交差点に接近するドライバー (つまり、読者) に徐行の指示を与えて注意を喚起し、文 (章) の要所を点検させる、といった具合である。

そこで、careful writer が *that/which* ルールを例外的に破って制限 *which* を選択する裏には読者の注意を促す意図があると理解し、上述のような交通信号的な機能を利用して注意を向けさせる方向を次の(a)~(d)に分類してみた。また、こうした機能とは性格は異なるが、やはり制限 *which* の機能と思われる(e)~(g)を加えて7分類してみた。

- (a) 当該文 (関係代名詞と先行詞を含む文) に先行する文 (章) (上記用法⑩: 先行詞を補う重要な情報が記されている)
- (b) 当該文内関係代名詞の前方 (用法③、④、⑤、⑥: 先行詞が関係代名詞から離れている)
- (c) 当該文内関係代名詞の後方 (用法⑥、⑧: 関係代名詞節の構文が複雑)
- (d) 当該文の後方にある文 (章) (用法⑨: 当該文内にある先行詞の例示)
- (e) 当該文内の *th*-音の連続による音韻上の問題を回避 (用法①、②、⑦)
- (f) 当該文内の構文の明示 (用法⑤、⑪)
- (g) 非制限用法 *which* のカンマ省略 (用法⑫)

3.4 *Economist*: 1988年~2018年の制限 *which* の使用頻度と用法の変化

Economist による制限 *which* の使用が1988年と30年後の2018年で頻度的、用法的にどのように変化したか調べるために、米国Gale社の電子ジャーナルAcademic OneFile (以下、AOF) に掲載されている*Economist* のフルテキスト記事を参照した。AOFが提供する最も古い記事が1988年1月9日付である。これに16日付、23日付の記事を加えて3週間分の全記事 (総語数190,820語) を1988年資料とした。2018年資料としては同年1月4日付、11日付、20日付の3週間分の全記事 (総語数177,574語) を用いた。

ワードの検索機能を使って *which* をハイライトして、直前にカンマのないものを選び、関係代名詞であることを確認して制限 *which* の用例として抽出した。表1に示す通り、用例数は1988年分が182、2018年分が68となった。各用例の意味をチェックしながら、NYTの用例分析と同様に、a~gに分類した。1つの制限 *which* が文中で複数の機能を果たしていると思われる場合には該当する複数の用法に仕分けした。例えば1988年1月9日付の用例番号12がその一例である。当該文は *Section 209 of the act allows an exemption for shares which are held as part of a market-maker's trading position, so long as they are held in "the interest of the purposes of that business"*. [英国会社法209条はマーケットメーカー (値付け業者) が商品勘定ポジションの一部として保有する株式に関してそれが業務目的で保有されている場合には、その公表義務を免除している]であるが、*shares which are held as part of a market-maker's trading position* の具体的内容が2文前 (*its market-making subsidiary County NatWest Securities bought a further 4.6%*)

に記されており、制限 *which* はこの部分に読者の注意を向けていると見なした。併せて、*so long as* 以下の副詞節が関係代名詞節の一部を構成し複雑な構文となっており、「作用域が長い」制限 *which* が用いられていると見なした。この 2 つの理由から用例 12 は a と c の 2 つの用法を持つものとして分類した。

このような作業の結果、1988 年資料から抽出した 182 の制限 *which* が 197 用例に、2018 年資料から抽出した 68 の制限 *which* が 83 用例としてそれぞれ分類された。ただし、後者の資料の語数が前者よりも 7% 少ないので、a~g の用例数を 7% 上方調整し、調整後の用例数を矢印 (→) の後に示した。(なお、h は NYT の用例分析にはない用法で、*Economist* の 1988 年資料に 1 例のみ認められた。*those* は人や物の代名詞として使われるが、前者の場合には *that*、後者の場合には *which* を用いることが通例と言えよう。因みに、人工知能を搭載したロボットは人間に近いと見なされてか、*that* が使われることが多いように思われる)。

1988 年資料と 2018 年資料を比較すると制限 *which* の使用頻度は 182 から 73 (68 を 7% 上方調整したもの) へと 60% 減、分類後の用例数は 1988 年の 197 から 2018 年の 83 へと 53% 減少している。一方、用法別で見ると、主要用法である a, b, c, d, e で 5 割強〜7 割強のレベルで満遍なく減少している。一見、制限 *which* に見える「非制限用法のカンマ省略」も減少傾向にあるが、主要用法よりは減少幅が少ない。カンマは本来は意味の明確化に用いられる筈だが、カンマを打つと逆に意味が不明確になる、あるいはカンマ過多の文は読みにくいというのが非制限 *which* のカンマを意図的に外す原因と思われる。

一方、NYT は 100 万語当たりの用例数が 1985 年の 82 から 2018 年には 27 へ 67% 減少している。そして、*Economist* の 1988 年と 2018 年の用例数をそれぞれ単純に 100 万語に換算した数値と比較すると、制限 *which* の用例数は 10 分の 1 以下となっている。また、NYT では制限 *which* の用法は b と e にほぼ集中している。*Economist* と同様に g (非制限用法のカンマ省略用例) の減少幅が相対的に小さい。

表 1：制限 *which* 用法・使用頻度比較 *Economist* vs. NYT

	<i>Economist</i> 1988 年	<i>Economist</i> 2018 年	NYT 1985 年	NYT 2018 年
<i>that/which rule</i> を破り、制限 <i>which</i> を選択したと推察される要因	1 月 9~23 日全記事 総語数：約 191,000 語 制限 <i>which</i> 用例数： 182 100 万語換算： 953	1 月 4~20 日全記事 総語数：約 178,000 語 制限 <i>which</i> 用例数： 68 (-60%) 100 万語換算： 382	1 月 1~8 日全記事 総語数：約 100 万語 制限 <i>which</i> 用例数： 82	8 月 21~28 日全記事 総語数：約 100 万語 制限 <i>which</i> 用例数： 27 (-67%)
a.<当該文に先行する文脈>	5, 6, 12, 22, 28, 30, 34, 37, 44, 48, 55, 57, 58, 78, 86, 89, 94, 96, 100, 101, 103, 104, 112, 121, 131, 138, 140, 141, 153, 155, 158, 160, 167, 178 計 34 例	3, 16, 19, 20, 30, 32, 41, 42, 45, 46, 54 計 11 例→12 例 (-65%)	42, 46, 51, 52, 65*	計 0 例 (-100%)
b.<当該文内で関係代名詞前方>	1, 9, 10, 14, 18, 19, 25, 30, 35, 41, 49, 50, 63, 72, 80, 81, 84, 91, 92, 100, 107, 110, 114, 119,	1, 7, 9, 13, 17, 24, 38, 40, 48, 60, 67, 68	9, 11*, 12*, 15*, 19*, 22*, 36, 37, 39*, 41, 45, 26 49*, 57, 58, 63, 71*, 73*	4*, 8*, 12, 13, 21, 22, 24,

	<i>Economist</i> 1988年	<i>Economist</i> 2018年	NYT 1985年	NYT 2018年
	124, 125, 145, 146, 149, 150, 151, 154, 163, 171, 172, 179, 182 計 37 例	計 12 例→13 例 (-65%)	計 17 例	計 8 例 (-53%)
c.<当該文内で関係代名詞後方>	2, 12, 19, 21, 30, 47, 64, 67, 74, 79, 82, 83, 87, 93, 98, 109, 115, 116, 120, 122, 127, 131, 136, 144, 147, 154, 162, 173, 180 計 29 例	2, 10, 11, 15, 37, 40, 44, 47, 50, 51, 64, 68 計 12 例→13 例 (-55%)	1, 6*, 25, 27*, 33*, 48*, 53, 57, 62, 67*, 68, 69, 70, 72 計 14 例	1, 15 計 2 例 (-86%)
d.<当該文に後続する文脈>	4, 11, 16, 29, 32, 33, 36, 51, 56, 59, 60, 62, 70, 78, 86, 90, 91, 103, 110, 134, 135, 136, 137, 155, 157, 165, 166, 168, 173, 181 計 30 例	2, 5, 30, 31, 35, 52, 65 計 7 例→8 例 (-73%)	17*, 21*, 23*, 30*, 40*, 43, 44, 54 計 8 例	5, 6, 7, 8 計 4 例 (-50%)
e.<当該文内の音韻上の要因(複数の <i>th</i> -音など)>	2, 3, 7, 8, 20, 23, 24, 26, 27, 32, 33, 38, 40, 42, 46, 49, 53, 54, 65, 66, 68, 85, 102, 108, 111, 113, 126, 127, 128, 130, 152, 156, 161, 164, 170, 175, 176 計 37 例	1, 7, 12, 18, 34, 39, 43, 57, 59, 61, 67 計 11 例→12 例 (-68%)	2, 3*, 8*, 14*, 20, 24*, 26*, 28*, 31*, 32*, 34*, 35, 38*, 55*, 56*, 64*, 66*, 74*, 79* 計 19 例	2*, 3*, 7*, 11, 16*, 18*, 20* 計 7 例 (-63%)
f.<当該文内の構文上の要因 <i>that</i> (or <i>which</i>) ... <i>and</i> (or <i>but</i>) <i>which</i> など>	18, 117, 118 計 3 例	6, 38, 49, 53, 55, 56, 58, 66 計 8 例→9 例 (+167%)	7, 10, 47, 59*, 60*, 63 計 6 例	14 計 1 例 (-67%)
g.<非制限用法カンマ省略>	13, 15, 17, 31, 39, 43, 45, 52, 61, 71, 73, 88, 95, 97, 105, 123, 132, 133, 139, 142, 143, 159, 174, 177 計 24 例	4, 8, 14, 21, 22, 25, 26, 27, 28, 29, 33, 36, 62, 63, 65 計 15 例→16 例 (-33%)	4, 5, 13, 16*, 29, 50, 61, 80 計 8 例	10, 17, 19, 23, 25*, 27* 計 6 例 (-25%)
h.<先行詞 <i>those</i> などが人以外であることを示す <i>which</i> >	18 計 1 例	計 0 例 (-100%)		
i.<用法不明>	76, 86 計 2 例	計 0 例 (-100%)	計 18 1 例	6* 計 1 例
j.<法律文書 <i>which</i> >			75*, 76*, 77*, 78* 計 4 例	計 0 例 (-100%)
合計	197 例	83 例 (-58%)	82 例	29 例 (-65%)

注:

(1) *Economist* 1988年、2018年の a~j の用例数は 100 万語換算ではなく、実数を示している(但し、制限 *which* が複数の役割を果たしていると推測される場合には、同一の用例番号を複数の用例欄に記した)。また、「*Economist* 2018年」の列にある「計 11 例→12 例」などは、「総語数」が「*Economist* 1988年」と比較して少ない分、用例数を補正して増やしたことを意味する。

(2) NYT 1985年、2018年の用例番号に付された星印は、用例が引用文から抽出されたことを示す。

表 1 の比較は限られたデータ量に基づいているので、正確性に欠ける可能性はあるが、1980 年代半ば／末～2018 年の 30 年間における *Economist* と NYT の制限 *which* の使用頻度は前者が後者の約 10 倍、この期間の減少率は共に約 6～7 割と大まかに捉えることができよう。

制限 *which* の使用が米国よりも英国で多く、制限 *which* 減・*that* 増の傾向が米国で顕著なことは多くの調査で示されている。例えば、Hinrichs et al. (2015 : 820) は、1960 年代初頭から 1990 年代初頭の 30 年間に、英国と米国で執筆・編集・出版された標準的な英語文章(written-edited-published standard English)で主格または目的格の関係代名詞制限用法における *that* と *which* の使用頻度がどのように変化したかを調査している。データは“Brown family of corpora”と呼ばれる 4 つのコーパスを用いて、60 年代初頭に関しては、英国は Lancaster-Oslo/Bergen (LOB)、米国は Brown、90 年代初頭に関しては、英国は Freiburg update of LOB (F-LOB)、米国は Freiburg update of Brown (Frown) から抽出している。いずれもメディア・科学・小説・その他一般の 4 分野の文章で構成される約 100 万語規模のコーパスで、4 つのコーパスの総語数は約 400 万語となる。4 つのコーパスから抽出した *that* と *which* の総数は 13,192 でそれぞれの使用頻度は国別・年代別に図 1 の通りとなっている。

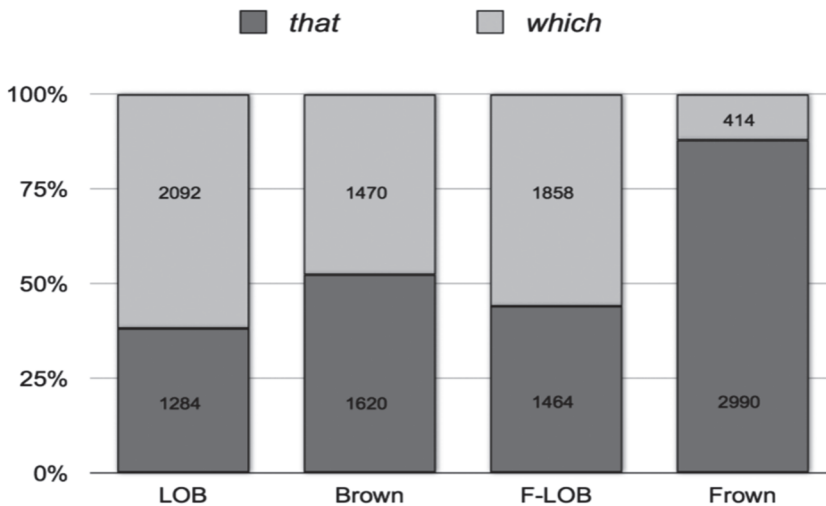


図 1

これら 4 つのコーパスは *written-edited-published standard English* であり、分野的に *Economist* や NYT の記事と大きく異なる内容ではないので、表 1 の数値と共に時系列的に並べてみると次のようになる。

表 2 : Brown family of corpora、NYT、*Economist* を参照した制限 *which* の使用傾向

	1961 年	1985/88 年	1991/92 年	2018 年
米国	1,470	82	414	27
英国	2,092	953	1,858	382

「前置詞+*which*」は Brown family of corpora に基づく上記の制限 *which* の用例から除去されている [Hinrichs et al. (2015 : 815)参照]。従って、表 2 に見られる使用頻度の増減は米国、英国ともに不自然と思われる。しかし、実際に手作業で、用例が制限 *which* (これには非制限用法のカンマ省略用法も含む) であることを確認しながら用法別に仕分けしてみると、*Economist* 記事では制限 *which* を「時折見かける」、NYT では「滅多に見かけない」との印象を受ける。*Economist* に掲載される通例の記事の語数は約 1000 語なので、平均すると 1988 年では 1 つの記事 1 回、2018 年では 2.6 記事で 1 回、NYT ではそれぞれその十分の 1 程度の頻度ということになる。この減少傾向の背景は何なのであろうか。

4. *Economist* と NYT の制限 *which* の使用頻度の減少とその背景: 英語の口語化と規範主義?

Leech et al. (2009) は Brown family of corpora を用いて、1960 年代初期から 90 年代初期の 30 年間に於ける関係代名詞制限 *which* と *that* の使用頻度の変化と原因を分析している。

先ず、両語の特質として、制限 *which* が関係代名詞節の始まりをより強意的に、より明確に示すシグナルとなるため、複雑な構文に起因する意味の曖昧さを緩和する機能があるとしている。一方、*that* のシグナル機能は、同語が多品詞である上に、その母音が母音弱体化して [ə] と発音される傾向があるため、*which* ほどは強くはないという。このような特質を持つ *which* の使用が減少し、*that* の使用が増加するという現象は何が引き起こしているのか。

この現象の背景には英語の口語化があり、その傾向は英国よりも米国で顕著で、フォーマルな響きがある *which* よりも、インフォーマルで会話でも多用される *that* が好まれる傾向が強まっていると言う。さらに、米国には *that/which* ルールに関して、英国には見られない強い規範主義の伝統があり、これが *that* 使用増の追加的要因になっていると述べている。また、1990 年以降の世界的な文章チェックソフトの普及で、*that* 増・*which* 減の傾向は米国のみならず他の国々でも強まっている可能性があるとしている。

筆者はこれまで行ってきた制限 *which* の用法分析から、careful writers は意味の明確化・音韻上の改善・文構造の明確化などを狙って制限 *which* を要所要所で用いているのではないかとの印象を得ている。Leech et al. が指摘する *which* の特質と重なる部分がある。

今回、*Economist* の制限 *which* の使用頻度を調べて意外だったことは、使用比率が NYT ほどではないにしても、大きな減少傾向を示していることである。制限 *which* には 3.3 項で検討したように *that* にはない機能があるが、その使用減を補う何らかの文章上の工夫が施されているのだろうか。本分析からはこの辺の事情は見えて来ていない。

以下の表 3 を見ると、制限 *which* には *that* にはない機能があるので、その使用減を補うために何らかの文章上の工夫を施しているかどうかは、これまでの分析からは見えてきていない。の減少とほぼ同じ頻度で非制限 *which* が増加している。もし *Economist* の場合も制限 *which* の減少が口語化と規範主義の影響だとすると、非制限 *which* の増加はどのように理解すべきか。もし NYT の制限 *which* の急速な使用減に口語化が大きな影響を与えているとすれば、NYT の一文当たりの平均語数も減少しないのか。NYT の 100 万語データをワード検索で得られるピリオドと疑問符の合計で割って、大雑把に平均語数を計算すると、過去 30 年間 12~13 語で変化が見られない。一方、ほぼ同期間に *Economist* の平均語数は 12~13 語から 18 語程度に増加している。つまり、NYT の場合には、文の語数を変えずに、制限 *which* を *that* に置き換えて口語化が進んでいるということになるのだろうか。*Economist* では 1 文当たりの語数を平均で 5~6 語増やししながら、制限 *which* から *that* への転換が起きているということなのだろうか。

表 3 : *Economist* - 制限 *which* 頻度推移 1988 vs. 2018

	1988 年				2018 年				増減
	Jan. 9	Jan. 16	Jan. 23	平均	Jan. 4	Jan. 11	Jan. 20	平均	
総語数 (以下 100 万 語換算)	60,788 語	71,291 語	58,741 語	63,607 語	59,921 語	58,116 語	59,537 語	59,191 語	
総 <i>which</i>	3,241	3,619	3,575	3,478	3,621	3,046	3,477	3,378	-100 (-2.9%)
非制限 <i>which</i>	2,468	2,399	2,673	2,513	3,271	2,805	2,906	2,994	+481
制限 <i>which</i>	773	1,220	902	965	350	241	571	387	-578
総 <i>that</i>	12,324	11,208	12,376	11,969	12,016	13,163	12,278	12,486	+517
制限 <i>that</i>	2,731	2,062	2,417	2,403	3,404	3,476	3,813	3,564	+1,147
制限 <i>which/that</i>	3,504	3,282	3,319	3,368	3,754	3,717	4,384	3952	+584

Leech et al. (2009) によれば、制限 *which* の最も重要な用法は文意の明確化である。*that* ではシグナル機能が不十分な場合に制限 *which* を用いられるわけだが、単純に *that* で置き換えると意味が不明確になるのではないか。この観点から注目されるのが Garner (2009:708-709) が解説する *Remote Relatives* (先行詞との距離が離れた関係代名詞) である。Garner は関係代名詞の使用に当たり、次の点に留意すべきだが、驚くべきことに殆どの文法家がこれを指摘していないと述べている。

- (5) Every relative word which is used shall instantly present its antecedent to the mind of the reader, without the least obscurity. Hugh Blair, *Lectures on Rhetoric* 65 (Grenville Kleiser ed., 1911)

つまり、先行詞は読み手が瞬時に認識できるよう、関係代名詞に隣接させて明示されなければならないとしている。そして、*remote relatives* の例として 8 つの実例を挙げている。

その内、4例で *which*、残りの4例で *that* が使われており、Garner はそれぞれの改善例を提示している。紙幅に限りがあるため、1例のみを以下に示す。

(6) There is a story told in the *Shabbat* about the famous Jewish scholar Rabbi Hillel *which* has some pertinence to the text before you.

(Neil Postman & Charles Weingartner, *Linguistics: A Revolution in Teaching ix* (1966))

改善例: *There is a story told in the Shabbat about the famous Jewish scholar Rabbi Hillel—a story that has some pertinence to the text before you.*

先行詞は *story* だが *which* から遠く離れており、他の名詞も介在していて紛らわしいとして、上記の改善例を示している。注目されるのは作用域が短い *that* による、作用域が長い *which* の単純な置き換えではないことである。もし単純な置き換えをした場合には、口語化と規範主義による制限 *which* 減・*that* 増には「文意の不明瞭化」という新たな問題が発生する筈である。他7例の改善例では Garner は *remote relative* を削除し、関係代名詞を使わずに全く異なる文構造に書き換えている。

制限 *which* 減・*that* 増は *Economist* や NYT でも確実に起こっているが、制限 *which* の使用頻度は少なくとも一流メディアに関する限り、英国が米国を遥かに凌いでいる。英米の一流紙を含む *careful writers* は制限 *which* の使用を減少させる一方で、文意の不明瞭化、さらには *th* 音の連続を避けて好音調を維持するために、どのような工夫を施しているのだろうか。今後の検討課題としたい。

注

¹ 小西 (2019:17-32)

² *The Chicago Manual of Style* (2010:298)

³ *The Economist Style Guide* (2010:148)

⁴ *The Associated Press Stylebook and Briefing on Media Law 2015* (2015: 94)

⁵ Wallraff (2000: 116)

⁶ Fowler (1926:637)

⁷ Ebbitt and Ebbitt (1990:257)

⁸ Genung (1896:129)

⁹ Bremner (1980:370)

¹⁰ Bernstein and Woodward (1974:206)

¹¹ Pinker (2014:237)によると *which* が持つ歯擦音 (sibilant) が *ugly* と感じられる理由と解説している。

参考文献

- Barzun, Jacques. 2001. *Simple & Direct. 4th ed.* New York: Harper Perennial
- Bernstein, Carl and Bob Woodward. 1974. *All the President's Men.* New York: Simon & Schuster
- Bremner, John B. 1980. *Words on Words.* New York : Columbia UP
- Ebbitt, Wilma R. and David R. Ebbitt. 1990. *Index to English.* 8th ed. New York: Oxford University Press
- Follett, Wilson. 1998. *Modern American Usage* revised by Erik Wensberg. New York: Hill and Wang
- Fowler, Henry W. 1926. *A Dictionary of Modern English Usage.* London: Clarendon Press
- Garner, Bryan A. 2009. *Garner's Modern English Usage.* 3rd ed. Oxford: Oxford University Press
- Genung, John F. 1896. *The Practical Elements of Rhetoric: With Illustrative Examples.* Boston: Ginn & Company
- Hinrichs, Lars; Benedikt Szmrecsanyi; and Axel Bohmann. 2015. WHICH-HUNTING AND THE STANDARD ENGLISH RELATIVE CLAUSE. *LANGUAGE* 91, NUMBER 4, 806-836
- Leech, G., M. Hundt, C. Mair, and N. Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study.* Cambridge: Cambridge University Press
- Pinker, Steven. *The Sense of Style.* 2014. London: Allen Lane
- The Chicago Manual of Style* (16th ed.). 2010. Chicago: University of Chicago Press
- The Economist Style Guide.* 2010. London: Profile Books
- The Associated Press Stylebook and Briefing on Media Law 2015.* New York: Basic Books
- Wallraff, B. 2000. *Word Court.* Orland: Harcourt
- 小西和久 (2015) 「英文メディアにみる exceptional *which* に関する一考察」 *The JASEC Bulletin*, 24 (1), 1-24
- 小西和久 (2016) 「関係代名詞制限節の *which* について—Barzun の用法に対する Williams と Bolinger のコメントをめぐって—」 *The JASEC Bulletin*, 25 (1), 17-31
- 小西和久 (2017) 「英文メディアの同格表現にみる制限用法関係代名詞 *that/which* の選択要因につて」 *The JASEC Bulletin*, 26 (1), 21-35
- 小西和久 (2018) 「関係代名詞の *that/which rule* が破られる一要因—関係代名詞の意味を補足する重要な丈夫が先行文脈に含まれる場合」 *The JASEC Bulletin*, 27 (1), 51-65
- 小西和久 (2019) 「New York Times にみる関係代名詞制限用法 *which* の近年の使用頻度変化と Orwell にみる 1940 年代の英国用法との比較」 *The JASEC Bulletin*, 28 (1), 17-32